毎月侍日記　下

和書門
二七四五七號 類
一八九函
一一架
二冊

内閣文庫
和書 類
二七四五七號
二冊
三函
一七架

内閣文庫
番號 和 27457
冊數 2 （ 2 ）
函號 203 110

辨内侍日記下

今年五節ハおほゐとの御所にせられて冷泉とのへ十二日行
幸あり寅の日十八日よりもよほし清暑堂の月さく清暑堂にて
ふりしきりて雨貫首もえ参らて清暑堂に参る人もなかりける
きさいのみやの乱舞なとのことともありて殿上人
えし女院の御かたの方へまいらせ給ふ富小路の大納言隆親
女房達さそひてひさし帳のうしろよりまいりあへり

五節淵酔

明治十二年購求

浅草文庫

のとこそ申侍しに、こよひはもうし給はるへしとて閑院大
納言まちはかりまいりけりあまたさふらひ侍しに
内大臣殿（二条左少将實基）いまはやしたくまいるとも可侍りけり
あまた給へさふらひしに右大臣殿[illegible]志らさせ給ひけれは（白鷺）
大臣のまへにまいりて[illegible]やらせしとあまたたまはりし
さとしかなたにあまりさし上たるかたに給ひたりし（扇）
にほひとうちこほれたるみなと給ひしに　弁内侍
志らさきはいかなる色のさきしにはうき世の中の花そちりける
御目をかへりみれは須臾なりましかはいつ絵のさまにも
似たる御覧のさまはこ其御物語侍しにとめ侍ける

けり　弁内侍
雲井への雪のひかりは九重やあまてらすとめかみ代をまもる
権大納言実氏の卿の人柄したまひしに雪ふりて
侍中将たかはる舞の袖のことに[illegible]すこし内侍あまたあり
つかへよとことの
九重にふりつむ雪の白妙を誰もかくやは思ひあまれ
返し　かね内侍
たかきへの雪は井の中のなかの[illegible]あまたの道と思ふけり
弁内侍
こゝろへまなれしまても思ひもよらぬ雲の上の志ら雪

十二月十六日月くまなき夜に院の中将すゑとも殿上番に
まいりておにのまのかたにてなにとなきものかたりのとき
に弁内侍まかりたるにまかせてすこしさやけきに中将に
おほえてあまたゝひかたりまいらせて中将
按察まかりたる人々とゝまりたる雅なる心にとゝまりたるのとりあはせ
花乃心もちいとりうつしありけるこのかはり
るに按察二位殿をもおほせられさやうなることにてある
よしきこえて　弁内侍
春といひて引やらぬ佛　梅ちるにはなきよりも中将
十九日の夜は佛名なり皇后宮定偏の宮もまうのほりたる

とり松

梅しと聞えてはなにてもいかなる月をもいとおかし
ひとにはいなる夜のこと人のかたみに拆松もみも日の比
所にてたとえておもしろきにちかくなりたくこそと
めてみな定平伊頼伊長基政みな皆みえし
女房のもおもしくもの音の心もなさしかなきかすり
なかりのまいらるゝと宣草もやしわもとかなしれ
し弁内侍
いと世めなきゆる雪の中てさえておもうの上大
まけくるもの行香にさいに人に四条大納言右宰相柏
中将實任皇后宮権大夫師継衛門督中将雅家右大弁宰相顕朝

あらたまのとしたちかへりける建長二年正月三日夜
よろこびをいふとてかうぶりたまはりし貫首殿も
ほのかにしとやかなりし四條大納言も不思つく
すべきよし奉行忠方がつげしことより清
涼殿にたちつゞきたまひしこともあるを
人くる故はくしてもみえしかども貫首千
夜もまたひさしく奥ありてみえ侍しかは

弁内侍

みなまでいらたちてまつちのたかさの代のみちぞしるき都の道
遠くて皇后宮のむかへの御やりあひてかはりけるよ

弁乃よみたりしとてやさしくまゐりし少將ぞよろこび侍
しことなりしかく少将内侍
志るしなくちぎるも波にたゞよふ思ひの沖まで舟ようするる
二月廿日春日使にたちまゐりしに上卿皇后宮権
大夫なりしにあまつかせつくまてはれ夕
清くよはひのかけりおかしく侍しかば弁内侍
はるかなる三笠の山にすむ月のかげのやまのはにかよふ月とこそ
またやといふこそりしにをかしくたまはりしとくや
みやくとりてものかたりして今く春へとまくやこ
乃まれとしたひとことくれやしありし満ま

佛法僧

とふをききつはなりしかひもなくやまちるむとおもふ
しくる弁内侍
去年ころ我身ひとつはなきよをやとおもひいれぬ
佛法僧となくと聞太政大臣殿より侍りたる代
常盤御所乃法花院またとられありしか竹のは
白きおとにたてまつりけるをさやかに見しおもすると
又ひえとりの花ちりにく陽に志しおもふとさるより
弁内侍
ときはの山に老君か代かさねしこ乃たかき山もなく也
扇を二つあはせつまなれて袖あけてさへ人ありけれは

かたら須京極殿とをくに大やまとのきのたとより月
乃さやかにまとゐするに侍しけるひとく物かたるやうに
みてよいておりしろく高少将内侍
東柳乃いとよみそ見えんた花物おりの月の光
にちりはそあまつとりたちをとめ時しらぬ
とに月乃さきおとしのかく弁内侍
東極の宮にてみはらしみ月さやけは
三月十六日七瀬の法おこなはれけるに使くまつれと大
まなの宮かりらんのみことさらに閑院殿にまて
りるとのりやおほさかくるさむとまさてありし

かへし少将内侍

桜花世々にさかえてゆくへと思ひなほ頼まれし名こそ残りける

又辨内侍

なにことも志のゝむしし経雲井には花もちとせと匂ひなる哉

三月廿九日御鞠ありける事冷泉大納言 公相 万里小路
大納言 公基 權大納言 實雄 左衛門督 実藤 右衛門督 通成
源宰相 有資 頭中将 為氏 為教 資平 忠時 經 徑イ
なとありけりにはにちりかゝる花に人々
のよういこゝろことにみえしもいとおかし
なと院の御方より御随身頼兼御使にて

五葉松

五
御葉松乃えたをたまはりて御鞠の懸にうつされける以中
将ときゝて御心もしろき藤枝をむすひつけたるに
をりからめつらしく御覧せらるゝほとには
咲花もあかて御覧する君か代のかさなる数にかそへてそみる

御返し弁内侍

か
池のおもにちるをりからあかす見てかはらぬ色も思ひしられて
御鞠の花のかけにたちならひ給へる御姿
とものかしこさも身にあまるかな少将内侍

かそへしる年はあまたの春をへてちとせのはなのかけそみえける

返し弁内侍

風は白梅あまりは桃乃色に出て数信の花咲そへき

其のうち文に婚事ありとへしと申まゐり　万里小路

大納言殿へ申されて御かへり事なつかしからんと申さるよし

おほせられけりしにも世中にまことしからさくからぬ

なるまじきよしか中将をもりし　かとよ春宮権亮

ゆゑある乃ひとく婚りあうひ侍よし　きこゆるに

もしまして見くしなすかとまれ　思ひやまして候と

婚事し給へかね　内侍

春風の梅らさと吹ぬちり其身もほとむなる種を忘るな

かへし　大納言殿

去年乃ほころさとこ人よりも前栽花にさかりおもしろき花

など我うちつゞきて後ときこゆる世も大かたと御

さゆゐあらし　勾当内侍

花のゆゑあまりにてをもつらむ梅もや風乃吹へき

知月の八日ハことに供ありしに　なむ乃まえの大納言

ゐまいせなる布施まく紅梅にちりたる花やら

なるに華やかなるをこそらの山乃くもし

きゆとをりうちくきうかきかはらさえに　つゞきより

人々我は殿上人そこともしのゆるゝせられ

と大きみよりも職事ハしたる人々まうれし人のごとく

かへるてこ

出させ給ふ庭よりし紫宸殿に位袋を御錫杖袋押を
らせし事をはしよりいとあはれにくやし思ひ出て

弁内侍 左衛門 光国

浦島かそのいにしへの言の葉もまことにいかなる
前の女使に中納言乃ためにいれさせまいらせ給ひしまて 山吹
そめしこれをきくにつけてもふるきことの袖をもぬらすと

て 弁内侍

白らいへさんの古き事にこえの御せちんからひてまいらせて
六月十一日の神今食しきりのまいりよりて上卿
右衛門中納言通行 弁 顕雅 内侍とりよりたちて

乃ち弁上臈まいりやたゝせ給ふ内侍出さしとて侍従を遣はし

かね内侍

をきゝてとは誰そといふなんさに我これ侍らんとおもひけるに
増のまいりの五節侍りしにかね内侍まいりとおもひて侍従
かれよりさてたちて我こそ侍らしかうとて

思しく 弁内侍

いつもかの我そ侍らんといひてなほさらくまて
権大納言に黒戸番御まれもありし鉄からふくまへて
をしかりしところに乃ち七月おもひのうちより
余り出給ふにもしあとかりけるかね内侍

雲居まて流れいてける谷川をたえすくみてやなほすむらん

返し　弁内侍

二無きことのしるしといひし五十鈴川人の影やうつるらん

七月十三日閑院殿の御としめの日事のなかり弁

内侍こゝろえてもたすねとなく心もとなき絶えぬ

して弁内侍

聞くしこそ久しくならふなりや空なき秋のなかめとくらん

八月十五夜也放生会也雨ふりていとくち惜し

さとのみなかめつゝまた月をまち侍りて法師なれ

れしかとも月のくもりさなからくちおしかりつる

に阿弥陀仏供養ありて三人まいりて侍るとありしに

そこ(?)なるらん(?)ものそ待ちし夜の月かな　ふえよし

まちわひしもとなくのあり心

なかりけりとはいはれそとの曇る雲　御所

みしやとまつらむ雲井の月　少将

ありなしにめくる秋の月もありやとく　御所

みちもうれしくもあはれなる秋のま　弁

まちわひてうちとけけるいつとはれて　御所

雲井のあまのはらさの月のおもかけ　少将

夜毎にあかす見る月ゆゑしかくまたつ月ハまよくの流

連哥は志川かんとゐる名所ともありて千里なり
まうけ侍りし此折りし法性寺殿大納言之住
殿き波給ふく古今集ゑくさの御はてさし
ゆくなるへし千みよりつくよるて哥の集に
とゞりかくへしとて侍る事しるて弁内侍
思ひ出る人もなきくなるなるは我名も我とはむ
ゆふ
十六日はこむすゐとさせとして万里小路大納言実奉
備さ歌　色紙もあるの使にたまはさせ給ふとてかくなむ
大納言殿為の法まゐりかれて忠しして
君か代をつくすも背みけ給ふよりは此万里のうち

返し　少将内侍
きみか代は法の命しるや千年も神のやまし
まてやうれやうちやさしくゐる松の見し
ゆやり
弁内侍
今宵はよ秋月もかけなるめや秋のことの里月八声
ほの月夜へ行幸なるんとて後夜ありきけり侍
しかとりたへ此ちなひとを七人しくいさそれ
侍りそゐるよ此人をそれくの乃ちとくま
りそふくありし代いうも少ね内侍そなや
くいそむる人やゐる侍し　かさとへいゐるたりし

代々にまよへるよし人をおもはせられまし
あまりにはゞかりおほくおほえくは法師になかりけれ
ゐて侍しかへりしより人のぬすみけることも無下侍
昔とる世の末人はなにとよみおきその名かへといふ事の
御禊事のおと法人もくれなくいと住つきしく
なりしにもの隠くして人々とゞ世と佛する
おもしかるにもかく代のまゝにてきこえひとへん
をかしき大盤所のあらはにたれは大夏
乃もかともさりとさくちかうなるとりてとして
身ちめくの侍しかへりみあまりに思う

給しくらゐやまさにおもらいて侍しをかのあなる是
すなとく人のかたちを給つぎの日まで法し
しむへき事ありとくらまめにいかに代まをひたり
おやのまゝにまとはさまく無用侍
あはさらにゝゐたらい今ちまなへき侍おやいはまる逍遥
節会除目祭なとのしたいなと法師に今思おもしにまき
しかるにおそと女房たちにせ侍るに佛なん
せし代太政大臣殿ためにいかはくて法をとりしおもり
なく侍らるむとくるけりとけらせ給く古にとて
はくらせてまいらせ給以中ね為氏良令に次第

きうり

なと書く家の次人数にて大納言三位とかき（太政大臣のむすめ）（大臣イ）摂家の
すけ殿（とう三位のむすめ）大納言のすけ殿（きんちかのむすめ）中納言のすけ殿
実定女宮内卿との（あきうぢのむすめ）弁清少殿（家あんのむすめ）少将たかの内侍
殿（顕時卿のむすめ）少将弁内侍さへ若狭なに若とさくもし
侍中納言のすけ家とかき權大納言になりぬ
前言次内侍殿よりなされて志さうかへて（織）
民部とうしやうにたちとそなく
せしにあひまつりつきくは御祢のすまり
御手向内侍
御乃宮状あなの志てい御かれは後よ左宮ふて乳母あへる

大納言三位殿は志ちらひの御使にたゝれしかは人々（七瀬）（失礼）
急かりくと思はせらるゝに中納言のすけ殿わかも
かくき（に）にゆきて御かへりやうにて侍りし御さうしな
人の御さ（記）くはらはむしよかたのしかうしきかし
ひとあまもとりぬと中納言少将内侍は三条大納
言かなりて御所よ志ちらひ（失礼）のかくかてはい
かとも志ちくとしかくせりあるとせしも侍りと
宮御清殿仰しよかくりきし侍り侍えさしも
志ちら乳もとぬとしかよそへしてまいりてれと
いかれにかすかとしき侍よ乃内侍も　いかゝせん

うとうく

しゆまつ事にて人長来りてこゝろわをはく
見高名をも成もちく倚りあか顔きゝえし給ふより
にけ屋く大江とみえ給く色なり侍くるひとまし
しも倚をわと知りんて招しき給はり舞の
少しにりきとあくやくと江とめ侍し又き見
も人をめしとて源相あん侍ふ治家大納言殿
桜畠にまいりて此は花を倚しめてくう給ふ
やく江とみえさせ給たりしていとしくうき
しかりしゝ梅壺をと給へいかもとみえく給
中にてくハ倚しうとをらむねをも紋はくし

侍るへしおとる給人て楊梅中納言あらむ事はいかゞ
ましそうしか殊にもとくゆかき給へてとまり
ころりちかくて江とみえ給ふ色取ハ人て御所へ侍
倚り事あるハみ自まし候侍百里小路大納言ま
とえなき長押の志も給一間より袖侍し出して
かうくかこゝよく倚りを給ても御り又為家乃中
大炊御門殿のきけとみへし給ひくまるへき
ほく侍ししも花乗つ侍倚りて給ふまりしは
見てきく事はいかゝる事もけるく御前にて
たか思もいてこし給をぬき梅壺三位と給ひてまとへ

白うきやう

かず八千とせまでにてぞとやすき世にしもけれはか　とか
しほゆたかなりとそくなりて池のさまもおもしろくて侍し
に左衛門督もちとえなしきてかひてそうを
ち給ふしいとゞおかしくきこゆるほどのたうのは
弁内侍
吹かへしまて志ら浪やうつ柳にけふ立まよひあけの
十月十三日鳥羽殿へてらしの御幸あるべしよし申　筆
ねとえおくぬりやすとなひ侍しにありしさまと
うれしくいとあはれくたく想侍し鳥羽殿の御所の
けふさし御覧しつさしとしもありにも有様から

いろいろの紙もやりとも見ゆる心ちぞはきりうとう　龍頭
鷁首　げきすうかべたる池のこころの気色などたとへん
かたなきにうみあかし内侍こそ有けれ内侍が將内侍
かり白くみしへのをにはまくの内侍柳
給くむもこゑこそなくと見えいつしてきこゆるちち
のり給ひたりいつくらも侍へしるとめてかね内侍
かくり思ひもせず請ことなき給つさんなのこゑゆのきしなり
右給をさくまぬ弁内侍
えふいふへつこゑ流なんとのかや所　庭のそら前なん
竜頭のちめてたりしを給日の事ともかいく

こゝろめしたる御事まれしかなかりけるくもかく
まつりの(萩戸)とき〱志ゐしたる夜しに太政大臣殿のゝ
おもしろく志給へはしたゝ給はさりしはいみしく
おもひまして弁内侍
白妙の浦なみ毛衣あるかへて深きをそらむるとそ覧
廿七日宣陽殿(仙花門)の所へ入らせ給ひて月乃
御庭の御つ不乃すゝき御覧せらるゝをかしきまゝ
女房ともみさりけるも宮川のおもしたるなとを
ちいさきみなかれおもふをとらなみといくたひのちり
なる紀乃ゆきてかへるんやと人にも問はゝや

君しのはか將内侍
もみちの数をかそへてなかめんとやかてかくおもひ
今さえ風にちりにける御事の種ある哉いとおもしろく御心にて
袖にうきんさと人におもはせられしはかなきむらさ(軒廊)
乃いまさ(御卜)秋の上郷あらく清らてかく此中納言こゝろ
別當乃なれことくしるきころしにおとろなく
こなたへ入侍しなにとれ侍くて弁内侍
そこつまとくやむ秋の迄をさ哉にみちたるを
五節八日六日あまり(朝餉)給はる紀日ろひさし
心ものやなと西殿廿日に清くまるさまのこと

かくて十二日に今出川殿へ行幸なり侍りし御遊

るに作文興もまたなく侍りしかく無由侍

雲の上や昔あらぬ秋なるなこりにてあらぬ月の影

とかうしは大きん殿の二首そきこえ侍しむかなり けり

てり御むの行幸乃こと(菊)くまもの紅葉とも妹の色まて

清けき年よりも世に志うけ作りにく志う見え侍

侍しと大納言三位殿あまりし行幸乃なかかり

こまりたるゆふまいりしわれを人ろなれ無由侍

秋の末月あまりし行幸あることにて紅葉の錦も見えぬなり けり

十九日節会露臺乃乱舞まていつものことく清前の

かへつえ
ほうつえ同しきこえ

御はしつよりえいとおりしろくまかりいとひえくのよ

ひまは先坊中将為氏六位や作さしあいてきよみたる

坊中将さ殊ひさうち大すめくかねつえ河ことくとよ

乃あるをはたゝのかけりきゝつと為氏か声みやまた

く前のあまなりしあ(を)し鐘忠はことぬりふぬな

らひなるとみく大つ紙をは志(白)紙く又く

たいの人ゝみやりくあし紙をとまく(黒)ろく

とえ以飛しこれをいたゝいはくいろすもかかり

刑部卿ときこゆるてんうつしやこれそ　西くく

んより次中いなひ川くまく十月えもせ　まいり

よにまひ給ましても猶のかなでられめや
ちかくとあるを過させられ身をさすらへなりしかど
御ひきありしつらにおもしろく興ありけり
たゆむべうこそ乃しきにいでらうるえかくれける
つぎにおもしろくこそきこえしものなり
為氏実文経定保長為教頼忠保基などもまゐ
まらうどあまたおはしつることなくて扇拍子
謡うたひて田植のまねしてことさらに
みだれて世に殊にそよくなりはべりき
兼同侍

君が代にあふひぬ人もあらじかし風にしたがふ霧となびくく
これらのきぬのとさ乃あるに女骨きをみてきう
かざしとぞきこゆるもやうく付首とりて連
寄せしるにきびいと狭くしかば内侍はうくへなく
よきことに過ぎ八九年にかなしむ人やあらん
と惜しくぞおぼえける
其同月八日ししのまつりなりあかぬまで興し本
ましてまた久我大将そ移く家のねとなえし
此乃十二日の行幸に供奉せられしその
ちかく宣旨ことありしも悲しかりにしも乃条

乃あさしにほひけるけしきいとゝめてたくみえ侍らしてゆきと
行末乃おとろかれ侍しかは弁内侍
蒼淵乃あさしにほひし面影のおもかけもはるかに立わたるらん
久しかれ内侍
玄武のたてもれいのことくにて立わたり侍ぬるこゝち
十六日ちよくせうなり吟家大納言（公相）太政大将花山院大納言（定雅）
左大将にまかりなりくにゆうしき大将さら
いとしめてたし其ちかく乃にほひ人さわ申文
こまかにかくより侍し月にある人いとしもなく
先祖ひさしきくらゐかり昨日のことゝそ仰しこと

左大納言三位家にへこの紀宗任まて五代乃歳
大臣乃子たまりとる紀をまりきむかしをとりたる
すゝやと仰られしかくて弁内侍
のかみえぬ山とにしと思ふものゝゆかりをとるせす
十二月十六日野宮紀乃使のこと日也南殿の庭に
まいりて大宋たいそうに法屏風あまたあるてゝ
みくらやつるひさすとかるをもちやれゆたる
あゆしを志乃こさくつるにいそうしあやゝに
ときすもいと侍むかまり雪かほそふも趣
しほくこゝの弁内侍

さるかり

風まぜ乃雪ふりはるる袖さむしのさえのつらさいかはかりまさらん

建長三年正月十二日法勝寺修正乃御幸

院の御方にはさし良所に御覧ありたりしに六

月あくて心とおもしろきにうしろとあらかりけり猶

なほ天侍しあそびまゐりたまひにて思ふさまにおもしろく

おもしろくて　弁内侍

さらに又二代の法勝寺修正を見るや昔にかはる世をかはるらん

十三日法勝寺修正内侍たりし冰のまへにて雪ふる

なかきぬらにいたることよりし御文ありしかは後には

御たかねの内侍さきんをもとめてかはりと心えて

大かたに雪ひくはなりてもゆきてさ満人まゐる

ことを人きはえもらくよらいするさとてるみと

ゆつらむみまはちとまくさらか次第うにて

見まゐらしかへりて御前内侍うくさぬ程に記す

侍りけり　十八日よりえうら日は出て法師の御

うとゑんう川へこさよりおほせことありしよ

十六日日さえ記すやまゐりてにまされくともまかり

やらも以中将えうの御かとしへも乃ゆらく

出にゆりいらもかすいるみやこぬへゆきしは

十七日雪心えしくやりたるあしことをよろ

院の御幸ありて此御所乃女房まいるへしと
よしありしかはむかへのくるま参りたりしかは
我身いよ〳〵経四条大納言のもとへしのひ給ひ
しのひさせかさねて
すきぬ乃ことなれは　もおもし
まへにはおほえのりたまふみすかけるにもなき
あたりめすいまはかうしとてきたるにいさゝ
山乃ことはともみなさまあさはつゝまへるに
おほ氏らうのつゐにとむかるをかくし御かた
おもけるにや法事にまいらんとかねてより

入道とらへてつゝせおもしゆかしきれおもくる
氏人ふかう人をさそて法ひにまいりむかふとて
こゝかくきちまうけてまへにうちわたしおほせ
おほきかね内侍よりいはみへゆきぬもかゝるにも
ゆきなとおもるとはえぬかたにとおもひ
うちたまへは御所をわしめいてとてさく
なに人とかくとたのしてやるもをのくらら
御もさせ給と御かきのことしもおもしきの
ち心やへ法紙よをさ給くくしさ
東とをすむしつのあひたらとむかく還御なる

はたくやり此法性寺かりのかこゐやそぬるかへ
くちおしくこそ御車にめし候と御太刀の
とりいれしひつゆゑにかね内侍
あらおしき事とかさねて申さるゝ事なれはしく
還御のゝち法師の有けるらんとて侍らせられ
法師らと紀(?)てまたけり残る事ならんしほれて
其の返し侍しきこえさせやりに
坊(?)りまねて御筆のぬる事をかたくて御わたりぬ
御座にて申さるゝも御返しの返しはとりに
中納言殿按察三位殿御(?)をかへて

おの頃乃ころ傍にみちに兵内侍
新田(?)如何雪とて少なかめ入る心とけてもおもへは
此雪に内侍にられたのめぬる面白き事もある
らんいかなる内侍ハてうしをたまはりさくらの人々は
も来さらう侍るとき御こそ相かはせらけるも
おもしくて毎内侍
思ひくらん御きこえありけるかいて雪此程をやらさん
をけやまかすてり井まさ乃あるまいら
せよといひかりくるみやまとおほまとそ
久堪ハかの時内侍おりくま

こ迄乃山吹のやまふきを折とりてこれを　ことへてかへさん

返し　中将

ふるさとは都乃あるしも猶もにて　みなしもしらかや

なりぬせめ小やまとゝ　御ことをしかもを　弁内侍

ふる里は花よりもまたさくら花のおくの志らかさえ

やらむ乃けふこゝろ

猶うきる花にも鶯かる小さくらあさりかな

さるゝく花山院宰相中将日ころ小倉山のくちにまうて

句みなやらさせたまひしにこのうちにかたらいまいりてしを

ふ人一枝折りとりてたまふとて　大納言局

かはりにまゐる

吉野の花のまちかねたるやまさくら乃色も　おもしろきや

返しに宰相中将

名もたかき花の上にも心あてにみさらめしは

三月十一日月おかしく夜ふけて侍りしに四条

大納言実家少将大納言など女房たちあまた

さそひて鷲尾乃花見にとおもしろく

侍りし月のいとおもしろく次白

少将内侍

見る花も数あまた名にしほふ　また鷲尾乃花の下に

かへし　あるし給へる　白川の大納言

きのふまて高き蓮の台まてもあかぬなるこそハ

法の声にもなき給ふなるを　弁内侍

あはれみを深き心にとりなしてこそひとへに思ひ定むらん

三月廿日に宣陽門院号かはり給ふを

まし宮のゝりしいてかせ給ふ御よそほひなりけんにや

見たくもあらましく　弁内侍

初春の名残をこそ思ひしか　ぬるふのことの葉

返し　かね内侍

何ことのよしもあらしも思ひきて　春の夜の昔ふるへは

しら玉

かへる

五月五日三条の中納言のりたかのもとへ

しらぬ玉　こ藤をみなきて

花さかりにまかり出られ　いとけなし

むかしひたるゝかきに露をふる　みしを

六条殿高倉殿にかよふことやとありしかは

弁内侍

あやめ草そこ知らねと玉ゆらも根にやふかき逢坂

返し　中納言

あやめくさ根にこそ知れぬ菖蒲の根

五月の御所より宮やまたかへるといふすのあ

やしほもかくこそあるらめ五六人ぞこゝちせしほどの
ひさしのまさく東面あきもあけやられぬとて
うし　いとをかしくて弁内侍
むかしよりあゆみをとめし君か代にすみはてぬべきさるらん
ときはの松にはつ夜のいろよりあさき世となるとへ
まくたれそ内侍も二三人ばかりまかりた
るかたへしあきたるに月のさし入る
雨の中に花の袖に見えし表着はぬれまさる
柳のかすみのうちみだし　こゝにたてる程
んときし頼りしもあら鶴のすゞきとめの

きゝあまたなきうちいたうかなしいとあはれ　こそや
とかきたをかね内侍
明てのこぬる袖からする月影にたゝとぞ思ふ水鏡なるらん
と書きてこゝらせる弁内侍
あすえとえたなおもかゝる御もとに　さぬよるのゝ
六月廿八日閑院殿　しあり女房廿人
こゝろめくやうしのあかしの物　こゝろもしろき
あらたにもありてあさきの内侍ことゞも兵衛内侍
かね内侍摂政（兼経）殿をもしめをきて　頭のかく
頭いたく上達部殿上人おほし二日かけてさ

くわは拝こそありけすゑこそしらてへいふ
しへ九条右大臣乃てり給へくらかなまひきり
けむことのひ出ろぬしへいまさら申し右大将
またまさ
右大将さんたちをあらそすらひてこそ
語しをめるてたちにためしあらくとう
くにみ　人々いつ通ぬ右まうさると於ほを
らきまたあひぬ
通源よれやまみちはわさとをて五秋とよる我こゝろや
常乃御摂まハこなりより於九けさらま右ら
沃懸地　螺貝
ひ役まりたるにつしはまそこ二のちのりれでん

もんさうたうひ

さうたうひをされとなはときのまけまうさこゆひ
萩戸
すまゐる法しはまをこはまとうかゆくらんふ
厨子　箱
たち紀はしをこまる千へのしこひつゐきんきこの
侘の法衣
さい八月二のこいは十五日さは仏しらさうき願の
をはりれうを紀かくあひのうち家
ここをも日るんさうあうひとうりさい
お　歳まゐん法師をさくる法つりはま
螢絵
まこの硯　ゑいは十五日かれくの
を紀やりこゝるやうし給たはあ　歳とまうく
つくるらんてまいらりたまかりたるをやうに

かく思ふまゝにたらで三日ばかりへて八はしれぬめぐるに
てよろしきとおもふあつさまへかゝりしほどさわれぬの
みそうちなるこそおもしろくまたありてのわ
うき人しらぬおほくだくだろまくさかぬ
たまふ三日ちかくて七月一日いろのもちかり
しふこへあやめとんぞつく　うきもとも
心地る人侍し二日ばかりて　さぬふきん
てうれしきあまるうり　のまるにぬれぬ
しいろくの花のくちく　あとともろく
山でとよりぬるとなりに

ゆふぐれそらを御覧じて御懺法ありけるに南殿の御
ちとせおもしろかりけれは女房たちにおほせて
露台に出させおはしまして女院の御かたに
まゐらんとしてほどもなくいとおもしろ
夜二三人すゑ大納言たちなどもあまた女房
らむせられしていとおもしろくしう
又十日やうやうめでたくなりぬるころ内の
夜よりとく東二三あたりをとめてあそ
まゐるに月あかくて仁寿殿の露台に出し
ろさきこゆやうよかりけりとてさぶらひしもとり

よ秋の月も光や増るらんことしの秋は露乃ふかき
すれとも光る稀と　折ふしにさそひありあらんと
て照しハあれは雨に中ね侍
見る月人まきを見とゝ侍月夜れハよ露まりもかやきかきふ
舟同侍
古乃様ハ露のまて下数ならぬ　ちとせさやけき
後月にて〳〵ら〳〵と侍る
中将しさめ院乃御所よ乃御なされし
夜のことなり十三日夜よ御申しく月
菊合詠多ならぬへあそひ侍りしつ

まてる見ゆると人におほせられしかハかね
乃方さ情みえ水乃ほと清き庭前
まい川のとハすつゝまて月花のしらあく候
ろくみかゝしたる六日すきて七月つる山乃
すゝかりしぬる川あやなすと心地よく
浮線蝶
かさゝきとそきゝ侍りしに二日ハまきぬ
ふきんてうれ梶すうかちのすゝぬゐのれ
しらく此ゑ乃くるとくるまよハぬ
さるらりをまほ御出清まゑ　世をさとれよし候
すゝとかな　まつうとハうりつゝまつて

見えひてたる只今もなんいふなるらんかいてもちゐしものかな
ゆくすゑ月はさやかなれやと思ふこゝろ猶たとへむかた
ともなし　小弁内侍
なれにし雲井の月の空もて　歌よみてまいらせ給ふ
弁内侍へ露台乃上は　ありける月ハ
昔のゆかしく面白くおぼえてなく
雲の上人やいでゝしはしき今の御遊をもおもひいでゝ歌よみ給ひ
八月十五夜二間にさぶらひたまふの内侍に小弁内侍弁内侍と
清涼殿の庭の月いとおもしろきをながめ入りいふ
して侍りし小南殿の御前にてありしまゝに
あさましうるはしきらんいさゝかなりきことゝもこゝろ
おなじこゝろめでたりし雲の上の月を南殿のまへまで見
けれ月の雲もなく殿上人あつまりてえもいはずをかしき
もし今宵は九重の内にて人あり程といふ
ことにおもひつゝ過ぎて思ひめぐりの涙おちて
ひて思ひつくしこそ程やさきけとてひ
とりうち見て同じ所にてしていとおもしろうのし
すまゐも　弁内侍なと思ひてこゝろざし
かくかね内侍
名にたかき秋の最中の月影にまして秋風ぞ吹

御覧しあはすらんをおもふへし　あはれなりこのやうなる
くらんきんゐにつくりせさせ給ひてきり　しほれ
八月七日記のとゝのく三内にて大きとの答句
東宮の内侍とのゝ右衛門督殿宰相　とめの侍従
内侍殿 とひろに申して とてへん　なれは
弁て左近のしらぬことをのみ申せると　おもし
まほろしやうなまに起にきて侍し　くて
少将内侍
夢のよにかくはぬ枝ちる心もうらやましきとも八重菊風
弁内侍

なとゝ高哉書もとともなくてかくし[illegible]の秋もれはも
宮内卿のすけとの院の北京の法講として参り
給しらせ給ひあさちひらむさ給へしと　しひ
とらすといふはしきおほえて　弁
なきけるをもかれは松を　かくろへとん　ひまたちて
九月十日
御しよろにこれく内裏のきつゑいと　おもし
ろしさへまていそきの御屏風つ　こまれると
まく池として ありし給　さ紀のこ
御かなるやうにゆるをたまはるらん　のあす

よりけるをそへけるに上にて右大将家まんところ中
てりたる乃ちらむとうやまゐらせさせ給へ又たる屏風のそ
これハ弁君の御返事をまいらせたりしを
ゐしこ　おもひしる侍らぬとこそつひ
ちらさもちらひて　かとこそも侍りけりて参りこ
はるハ成　もうらしくれ侍しかハ弁内侍
夕時雨の残る露もしらぬ哉をおりあるぬ御返事
九月廿七日　権大納言ひゐらへんなりし紀乃さむ
川とみんさうし　かゞみにまゐらせんハをとすへら作
かんなとの絵をかきて　真ゆの月いつる絵ありて

いつも絵しに二乃こいける所をうすくそれとなく御文なるを
うたまへ出るひゐなきりといふ許紙なるあてゝ
き給しおりかゝれ世もしらくなき人くるしと
えしとさとにかね内侍まかきてしたゝしハ
中将内侍
雁にて秋風の雲にさへいや　たつハをるかへりのそら
返し　弁内侍
をるかゐる涙やハようれけつるまま　思ひのほかにさそな
さやかに侍し頃　十六日新大納言まゐりて
藤壺にて涙いりくさしいける　よそきりとまつ

うらなれとも満まいり縁ぬ也へいとひさし
よきりと沢の花にたらしてなかのめ
志つかへりたる松葉まてわさとなる沢な
みるか　みへりみとよきはとならえひ
すまいてそ　さありし志やのくちり
にしそあらるをされを承そりなもりかへしとて
とかねの
つゝとして侍しかへ奉同侍
少りやるや何とよふあるぬのも秘宝の心風に社ちかぬ
逸しかね同侍

大和ゐさあるぬの秋らう唐萩のえたちも松そ見すれぬ
五節八十三日よりのし満る月にまちもし給へし
てうちやうとことゆ　名古のくなとしてあれてん
三河しやも侍しかて志いとにけら有かり　さるからう
大守とはむかの　知るみとを給し
よう社日也ら　えへすと八るかく　机辞に
御宗わ　仁和敬へいりせ相ちし満となる右大将
右回とこと当貫そうあさきちりりて犹流く　とこかく
ひるきみいとも　ろくい乃ちしらやむもさひつき
てゝそ紀うえく引るくりてまいりつたらし

ことかくふありてみえ侍らハてぬるハれ
しもとよものしろく侍きのみく
随杼さる　中将坂本（親頼）つとたつ杼とまてしるしもと
そすきをあそいしまへたりけるを次第をとりて
まやし侍しにもはおさ朱よおりてすゆしこゑ
次第まなり給くらふまねして侍し
くみえ侍らぬ文ありしへて秘密乃代は
せとありけりわうらい（蓬莱）の山清さいてさんと
つるひ（一度）切るち事あとふうゐゐらるひ
ていのつありとゐ山とあるらむやと

なりて次第くに
いふよもよのきの
きはありくしまつとことしてちやさせそうは
もしくたちくちやうせい（長生）ふし（不死）のくすりとゐふ
すきにかくとをするとて侍しとおもひなくとのかへ
しるゐ之侍しかそいとむつりしとありしよこれまし
思ハひとりとつきこそけらしたりと

これもおなしくて　兵衛内侍

たきあへぬ白ひを袖にうけし　ぬるみの雪かけしこそ

十七日夜　して侍しにえく侍

とまらぬといふ　ききりしかとさたかく

いさよひそや　くさの弁内侍

まちあかす霞乃袖にはれこそも　なにやあるらん

二月十四日満くれ　ときくれとよりのことのまに

うちとけてむめさく　よいきく

あへて世乃名もなき今ハ　雲ゐの花のたねく

返し

梅花さかりに雲井ちりけ　あまての名とやたゝむ

小山殿より　こしといふ人あまたにて　風流

したる　むめ花おれ　いろせさせ給てこの

花の弁によみてと仰せをありしかハ　兵衛内侍

當時とて梅花むめの花むしとて今にうつしかれ吹くる

顕方乃宰相中将あけいまへのものとて　いと面白かり

満いりて侍　貫首にあきらめちかくなれしるしとても

なみと　なへし　十九日雪ふりて朱

て　なき世には雪ゆるへきよしいかさま井

経忠　惟基なとめしくて鳥とらせて

せり逃けるに野中の白雪ふりまさりゆくし
ともみる雪よりも錦出家乃かむさの御
れて色侍し いまひとまいらせむとかきまされ
しょ まにて みそかにし 山家道のうり
中将内侍
色深めらし 御ゆきを見るには我袖 逃もよれなるも きも
わたし 雪見て
あふ坂乃関ちかき所に見出也 千載返とハ
四月十一日御 着り太政大臣と相まいりて 世継物
けらぬきのめ ただこと事けりときなるよけいことにも

御いとをてとく 藤さまにて 御覧いたしける
とりと見ゆる色ふ雪積て 花しやりいとおちらる
たくゆきとすらくまいりて右大将と聞えていきん
の御幸小御いりまゐらし御ひとへ袖の錦に
大納言みけいらとにさめてたくて 弁内侍
嵐山の名花の空ちる紅葉めて 吉野にや侍らん
御てあれ 花ととも大いに乱るるよりまいり
たるし むかし新花山院乃 御繪又
円融院 侍しよ左大将 関白太政大臣 成時法
幸よりとともに人とみてまひとくゆく

しかりける　ならひておとにきくらん
きさらぎは　相坂をこえしかは
いつの大ね　さくまはきのふけふか　出てく
弁内侍
咲すらむ昔乃花の色　枝にひはなさゝらめや
土御門乃宰相　つまへのとりてみるまに
きみとあらん　目谷をかへる渡のこゝろ
侍けるに
雲ゐにかのみまたるゝや郭公　きかせむ
返し弁内侍

くされ

かゝる渡雲の上は花やかなる　てたる紅のおく
車のさしきぬは同しにあまりにやさしの位
雨井のさいさ乗乃のとの　さかりにてよし
とうの弁経光その傍に内侍その傍に安福殿　勘解由次
河霧立て　かくて侍しにつまとみえて　道の
ことに　おほくていさゝ川わりたるとはるかにみえて
侍弁内侍
名をとめし川わりて波のまも　うとは浪の音も　ききす
五月雨し　つきとくるに大かた
出居にさふらはるゝに　て大かたものゝ

日法花さるかたきのちんあ　けしもおゐ
まひの内裏にくし見はたく　のくさ
のつりたる柳の木にて　みゆきて
弁内侍
御こゝろみまゐらせ給にあるゝハ　のきくのしもなき
五月五日に御　女房たちにあや
うぬふとせさせ給ひしも　あやめまいらする
御けハ存しさわとふかさ　大臣殿
御ほとゝきすの人よりは百りありし
勾当内侍ふとともに九乃とよりまゐりて二間

まゐられし日弁まいらせてまいりて御
かと　以中将あそんしめして清涼殿
よりハみとこしきひろ庇の二まめしさのは
御前一間まつらしまいり　まい人にや
みえさせたまひといふあそひてまいりて弁内侍
菖蒲のあやめハ白地を御こいろかえて　と人やある
六月廿日より最勝講也
しつらひていまゝ事ともさしはらぬなとおほ
清んせさせ玉ふしおはし次まて女房たちてと
てとのかなはせられしせいとけり

是ハ二位家三位家なとも紀あるへしゆ
来たる四條の大納言も侍し中にて編録する
をかしきこともをしへ給ふ　かゝりける
論議なとをすまししまゐらするにいつも読師の
やうなることもあらくまいる事不
いとおかし　ちかく後の御撫子
ありさまにて法性寺女房　そは法も侍
しらさけ名の年月の職　侍とす
處かくまいりて夕に候ふ以下紀
あそれ侍しをおもしくて弁内侍

いそけて給ふ名をもらいて紀　かへといへさん
其六日菅三位あり　侍りてむかひの
文ありすきやもてむかへ時に作ら給
みら　かる侍従内侍大納言とまいり（菅三位のむすめ　同じく）
あめにし日おもしく　以あへさよしかれそあ
かくして弁内侍
数多出や大和ともらも婦人ハ給後表のいる滝らん
法文をミる　以後法花ハいうもおもしてまして
菅三位にくり中ま侍らかにそのと法物語なと
さし給をとらえぬをかもいとおか　侍し

大すゝみを過ぐしとかや志ほとにまけ
さなりけとのし火乃ゝ實代まみれて中
ちんなくかくてむかしけるとうそまをと
ゆしことふあられぬいへしく於は
あめのこせんそれとの火をあけ過る
さぬ兄といふ
ありてあさ過ぬ
まゝく大そん家
かとふあるりしかく
太ほそてあかりにはきるといふまゝ

このあるにおも
いそときて兼ゐんみを　ては
しに茂乃は兼りあ
かすそてひもられ
井のふ過

一とはいへはあさ滿つりとうゆ
みなつ月乃ころすゝ
ちおもしてかへる梅影
流きろは詩しふ志あれそなる　なすま
　るあ見て秋といふまゝ　志ほとすよしあつけ　を
あ紀のおりひ過須志あまれこちりとゆれと以
ひそまりしいゝし志まれてふことさむ思し　いと
於かし大納言まきとされまれしといふへと於はを
らぬくすまとのしこそ　えてうるあゆまはし

屋かりて　まいたことてら
いつ過のめすちと
大住おもふ　悠え

なきとやのこゝひしくもしめず我これとかきてし
おなしくハ人やとゝめむとよむまつかまはあらぬ　まゐら
あさかれ近衛司いりて持ち　きこゆれは　まゐら
うち代まうでの少将の大納言殿　とく
てまいりにとりしとられしることのよし
御きゝもと大納言二位とのまはむせられしうハ
子孫思ふよ我が鶴のみも河なみ　いときゝはたらかす
神楽宿ちまえし　継とりとて流れける
有りしとゝのこそ猶よしとお　弁内侍
蓮葉乃るゐのかへしか　まつ人ゝ　みなへし

夜みよ秋月　まして三条中納言
ゑんやうにて宰相中将　あさかれ近衛司乃
法師なる御しれと法師なりきい　して月
如らむもたて中納言いゆみ秋ほりさてん　年まかいハ
つきたるやうにゆきもそへとみえ月まてひかり
みえ白い文あつてかいみなはるとや侍
しもと大納言二位と秋をいふのよしありていふなり
あらいらしきとゝと侍り　かたて弁内侍
久かたの照日にあゝといふわれて君とゆらん夜の光秋月
五月十三日院御所乃法　しかまつ

どもたちぬ秋あけて人ゝのふ
志とりしも鈴むし乃声きこえ侍
ろくなるかね団侍
折ふしとて老子のうたも詠も　　雨の音あるれ氏
返し年団侍
秋もすゝ月之露ちれぬあ　　菊ある秋の花にちる
七月七日　　人ゝかたりてよりゆち
きかさくあらね　　まちくさ見えぬお
とまなくあらね侍し侍　　ゐ哉き祢て
こさてあきかし　かね清涼敬

ゆきあひ侍る頃常乃法衆のせ（茶イ）　　里あら
むそひかく侍しもおりし給く
道すがら御巣乃寺して　　きこ庭の松寄
廿六日橋政発まいらせ　　の仏き方おも
しる（か）のもゆをすり起須ともまいりて
まいりもひと折かを添ひとつ也発句ハせうそくあなて
し侍とて其興発句をかき給し年かね申之人
其意をいそしまし其分ともに申くらし作をて
給ふし給ふ　法のとゐ乃うち御詠をくさせ給
もしかゝゆひ比もの仁寄發のうらしみしら

くとゝり川里　まれにこよひくもらぬなとはきさ侍

あと月乃ゆかり　らそおもふくく弁内侍

ゑれ竹の秋なきまれ月やなれ　少将内侍

八月十五夜月　諸ともにみつる月かな

故大臣

池水はこよひの月をうつし　みるかひ有

清返しか

よふ人そ我をとこそ秋　まちわかれぬるまそ

まこと

雲ひとつなき空の秋をさそ　乃月をまそとやむして

侍くれ　しりしきのあしたんまるよしゆきさ

いとをしと思えりとしむつをとれ

いはさ　さ待しけれはこれいとをし

といふ歌　うれしさうれしはたへと

侍しにかね内侍　さりやとありし

かともいまのうに

おほ絵しておほくねるまへ　よりとしとともにまし　より遠

弁内侍

夜河乃いとをしとう子年　まかりとえまもまた　ちや

主代子　人まかりいまこれもとん

侍しに　かね内侍　　とて絶へなとて侍し
又　吹田殿の法　　まりや侍けん
松本つらぬる事　　とらは太政
大臣殿相ならせられ過ぬ源と
和哥乃浦に入ぬるさとり須〓　　そこに好むの神やな
如絶し
色々しく悲とよふ跡のありかゝて　　え高あの郷より
又　　て太政大臣殿より
あみちを絶え絶ええて涙く　　袖乃ささと見てもたえなむ
御

志の桜木に絶て涙なる　　和哥深山と思ひ入ぬる
辨内侍
あみちを絶えつゝ手とも出でし　　乃をさて悲しき
女院乃御かくさよりいふく　　と海いろを
さゝせ給ふなりし　時そすり中せて和泉をとて侍りし
又　かね内侍
流を源風し和乃忌綾九重にみよ　　源や紅葉なるらん
御返し　かゝりて　　藤乃法花の主乃とすよ
きくの枝につきてさし捧なり
九重に今を夜宿も分よ君乃代よ　　ちとせ志らむ菊の如

又御返し
出る月に程なき世をぞ思ふ　とこそはつらね
弁内侍
九重にうきてこそみる月影も　かくもあらぬ世なり
九月十　御連哥侍しに　何見えあり
ていとく　月をみる人ぞ満るけりしに
宗忠
かくおもひ出させてきける　乃地下る満して京極殿
今更にいまゆかりの空哉
御返し　月影をわかる宮こも

誰もけふ我身の上の秋ぞうつ　ものをもふ月と思へ
弁内侍
もろこしも思ひのまゝの月なれど　秋も見し秋の月
八月十三日　かくも月影ともいま
大殿にて隣の方に語　くて弁内侍
何ともかくいひなされき　宮にも
と　院の御所より御人ぞ御使　とて
御返しとて御ことも　きつゝあれきて侍りし御前に
名は　きて御ありて御もん　きよし
いへにはまゐらる
まかりてひさしかりし事なし　このしか

いさ志ら浪雅よ哉　　ともかくもさて世も侍

小辨内侍

いくとせもおもひいでゝや

乃をくらみみくひかり

いらせ給ひし　　出御なりて後え

侍しに女房達これ供奉人々

つとめて侍りてそのほどおかしう

大納言も浦しつまりて多めく

ともへ　　内親織

侍る　　み

これ　御と

私云

此集後深草院辨内侍守多見之仍号彼集此

辨内侍者同院冬嗣公一男中納言長良卿之

末葉中務大輔信実息女也（辨内侍日記トモ云）

天保九年戊戌九月七日書写畢　伴直方

国立公文書館
National Archives of Japan